

for Better Sound Creation

よりよき音色を求めて

ハイトーンは、喇叭(らっぱ)吹きの憧れである。先頃この世を去ったメイナード・ファーガソンをはじめ、いわゆる「ハイノート・ヒッター」と呼ばれる喇叭吹きは、いつの時代でも一般大衆から喝采を浴びると同時に、あとに続く同業の後輩たちから熱い羨望の眼差しを浴びてきた。「ファーガソンしか見てきませんでした！」と語る、平成日本の次世代型ハイノート・ヒッターのひとり、田中哲也氏もまた、そういった熱いファンのひとりだったのだ

吹奏楽が盛んな地域の一つにあげられるのが静岡だ。田中氏も、多くの名人達人を生んできたこの地の出身。氏によれば「静岡は吹奏楽が盛んな土地であることは確かだが、自分が育った三島は別にたいしたことないです…」と謙遜ぎみ。さらに、高校からトランペットで楽器生活に突入してからずっと「楽器は独学でした」とも語る。

「ファーガソンの音をはじめて聴いた時、衝撃が走りました。それ以来、すべてのことを捨てました(笑)」

すべて、とは、トランペットに関することである。つまり、クラシックや吹奏楽の中でのトランペッターとしての道は捨て、ひたすらファーガソン！という青春だったのだ。しかし、独学には限界がある。

「正式に教わりたくてもどうすればいいのかわからなかったから、こりゃ東京の大学に行くしかない、と思って…」

見事に立教大学に合格し、ニュースインギンハードに身を投じる。



取材は東京・銀座「山野楽器本店」にて。すべてのBSCのモデルを吹き比べていただいた

「当時はビッグバンドってあまり人気がなかったらしくって、ボクが入った時にはなんと喇叭はたったの2名。もうひとりがアドリブ指向だったので、こっちはまよわずリード指向で頑張りました」

セントポールの学舎から、希代のハイノート・ヒッターの歴史が始まったのだ。「ハイノートが評判になるのは悪い気はしませんが、でもそれだけじゃないぞ、というのが正直な気持ちです。もちろんビッグバンドのリードは誇らしい仕事だし大好きです…でも『表現者』として、本格的コンボへの欲も、もちろんあります」

現在、自らの名を冠したビッグバンドを率いるかたわらで、新たな「コンボ」

としてのスタイルを模索している田中氏。「そういうセッションでは、BSCのように落ち着いた抵抗感が楽しめる楽器がいいかもしれませんね。音程や吹奏感も素晴らしいと思います。ボクはリードプレイヤーとしての仕事柄、すぐに楽器を変える気はないんですが、新しい分野へ冒険する際には、この「ニューヨーク」モデルはちょうどいいと思います。まったくタイプが異なるけれど、楽器としての信頼度は申し分ないし、心地よい抵抗感の上で音楽を創っていく、という、ボクにとっては新しい経験が楽しめる可能性がある」

当日は、ほとんどのBSCモデルを試奏



106S「ニューヨーク」も、外見は「オールラウンド」「ミレニアム」などとほぼ同一。ベル部分のレゾネーターも、ベルクルークの「背骨」も一緒。しかし、それぞれ音色が異なる。「BSC七不思議」のひとつだ（…え？じゃああとの6つの不思議はナニかって？それはまた次回のお楽しみ！）ちなみに田中哲也氏のコンボ、も動き始めた。次の予定は9月6日(木)田中哲也6重奏団@新橋サムデイ19:45～（TS佐藤達哉 P 守屋純子 B 古西志哲 D 小山太郎 アルトは未定）

していただいた。501Gを除いて、ほとんど外見上の見分けがつかないのに音色がすべて異なるのがBSCの特長だが、「106S「ニューヨーク」は105S「ミレニアム」や303S「シンフォニー」とはちょっと違うニュアンスを感じます。逆にそのふたつには通いあうものがあるような…」

ご明察。106S「ニューヨーク」と206S「オールラウンド」は同系列で、105S「ミレニアム」と303S「シンフォニー」はまた別の系列に属するものなのだ。

「なるほど、大きくわけて2系統に分かれるわけですか…」

BSCならではのキメ細かいもの創りに、希代のハイノート・ヒッターも感心することしきり。

「もの造りにこだわっている、という職人氣質みたいなのはいいですね。我々も職人ですから、使うならやはりそういった『気持ち』のこもった楽器を、じっくりしっかり使い込んでいきたいですね」

We are Brass Sound Cats !

猛虎連敗を止めた黄金の501Gを手



GW中に連敗を喫していた阪神タイガースの連敗を止めた501Gを手に入れた、猛虎軍団と喇叭(らっぼ)への熱い思いを語ってくれた高畑氏

ひとには確かに「表現の自由」というものがある。しかし、言うに事欠いてご自分を「ヘボ(へっぽこ)喇叭SHUN」と呼んでしまうのは、いくら謙遜でもちょっと謙遜し過ぎじゃありませんか、というのが本欄担当者の正直な気持ち。今回ご紹介する高畑俊一氏のHPには、「ヘボラッパ吹き」の独り言なるコラムがあるのだが、ご本人はちょっと「ヘボ」なんかじゃない(こんなツッコミをいれるこちらにはヘボじゃなくてヤボなことは百も承知ですが)。「ヘボ」どころか、現在は自ら経営する会社にスタジオを設け、地元の「三田市民オーケストラ」や「スウィングガール部ビッグバンド」などで活躍する一方で、音楽好きの仲間とともに「SHUNのミュージックパーティー」と称し、毎回100名以上を集める楽器持参型ライブを展開しているという、文字どおりの「猛者」なのだ。ひとりで吹いて楽しむだけではなく、仲間を増やすアイディアに溢れているのがSHUNさんの素晴らしいところなのである。しかもテレビをつければ、運がよければライブで氏の音が聴けさえもする。タイガース私設応援団員としても活躍する高畑氏の「定位置」は、もちろん甲子園球場ライトスタンド。球場の喧噪を賣いて響き渡るハイノートが聞こえたら、それは高畑氏かもしれないのだ(註：球場では正式に許可された前述の応援団しか楽器を吹くことは許されない)。しかもその音が、よく響く美しい遠響性のある響きだったとしたら…それは、あのウィントン・マルサリスも愛用しているサテンゴールド仕上げも美しい501Gなのだ…って、高畑さん、サテン金メッキの楽器を球場に持って来てくださるか！

「ええ、ちょっと考えましたが…でも、我が愛する阪神の連敗をストップさせるためですから、日頃はブラック塗装アップベルに総改造した特注「虎ッパ」を吹いているのですがGWは負け続けて…(泣)」

その結果、見事に猛虎軍団の連敗はストップ。その後もゲンをかついで、都合のつく限り501Gは猛虎の応援でハイノートを響かせている、という。

高畑氏が楽器生活に突入したのは、中学2年の頃。同級生に誘われて始めたホルンは、転校してからトランペットに変わった。それしか学校になかった、というのだ。しかし性にあっていたのだから、それ以来、トランペットは生涯の伴侶のひとり(…へんな表現だなあ…)となった。実際の「伴侶」である奥様の御理解の元でさまざまな名器を購入され、その数は優に100本以上。マウスピースも、200本以上。(現有は約20本と100本)

「しかし、私はコレクターになるつもりは毛頭ありません。いい楽器に巡り合えたら、それを徹底して使い続けるつもりなんです」

そんな氏が「これで楽器運歴も終わりか…」とつぶやきながら見つめるのが、先述の「連敗ストッパー」でもある501G。

「連敗ストッパーという神通力はその後のないのが判りましたが(苦笑)音色が素晴らしいので、どこへもっていても評判いいですね。暖かい音色で、歌うように吹ける喇叭吹きを目指しています」

所属するオーケストラでは副団長をつとめ、管楽器では最年長と言う昭和31年生まれの高畑氏。しかしオケでは一番を吹き、今年の12月に予定されている定期演奏会ではチャイコフスキーの交響曲第四番で501Gをオケデビューさせることを画策中。

「そのために体力削りしているんです」

最高の音色のためには、努力を惜しまない。しかも、自分だけが楽しむのではなく、仲間造りにも熱心なのが高畑氏の素晴らしいところだ。

「そもそも私が楽器を再開できたのも、仲間がいたからなんです。多忙だったために学校を出てからこれまで10年単位で2回程楽器から離れてしまったのですが、やはり音楽好きな仲間と一緒にいる楽しさが忘れられなかったんです」

40歳過ぎに再開したきっかけとなったのは、ヤマハの「カンカラ」だった。

「初出場で努力賞をいただきました(笑)昨年まで7回連続出場して、やっと念願の神戸大会でグランプリをいただきました。」

そこであらためて同好の士の多さに気付いた高畑氏は、自分のHPで初心者の方々によびかけて管楽器カラオケ大会を自主的に始める。又タイガースファンの初心者トランペッターに対し「SHUNトランペット教室」を主宰し、お弟子は30人を超えると云う。それが先述の「SHUNのミュージックパーティー」にもつながっているのだ。

「いい楽器は、いい仲間を呼んでくれる気がします。これからも501Gで、いい仲間をつくりたいですね」